

神戸教区第六代主教 ヨハネ 古本純一郎 師父を偲んで

『追悼 古本純一郎主教』

主教 オーガスチン

小林 尚明

古本主教様に最後にお会いしたのは、昨年末のクリスマスが終わった12月29日(水)のことでした。ご挨拶に伺いますと主教様は、「ひぎが悪くてね。年が明けたら孤野(三重県)に夫婦で行くんだ」と笑顔でお話くださいました。主教様は、2004年3月末で退職されましたが、その時に、『贈る言葉』として、神



ヨハネ 古本純一郎 主教

のおとずれに、寄稿されています。

『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに、望んでおられることです。(テサロニケ I 5章16節、18節)』を引用されて、「このように生き、生活することを神様が私たちに望んでおられることです。しかし、こんな戒め、徳目を並べられても私たちの努力や信念では到底達成することは出

来るものではありません。ただ「キリスト・イエスにおいて」できるのです。キリスト・イエスのお助けと恵みによらなければ、神様に喜んでいただける生活は出来ない」と教えられています。」また、「キリスト者にとつて、喜びと、祈りと、感謝は不可欠です。どうか皆さんお一人おひとりがご自身の信仰生活を省み、真に自分はキリスト者であり、神に喜ばれるものであるかを問うていただきたいと思えます。喜びと祈りと感謝にみたまされた私たちの生活こそが証であり伝道です」と語られています。福音宣教に生きられた主教様らしい言葉です。主教様の天国での魂の平安を祈ります。

(神戸教区主教)

* * *

『古本純一郎主教を偲ぶ』

パウロ 宮永 好章

古本主教様の訃報を聞き頭に浮かんだのは、昇天教会へ着任された頃のはつらつとし

た新進気鋭の青年聖職の先生の姿でした。私はその後、約30年間昇天教会にご在任中は信徒、教会委員として、教区主教に就任されて以降も常置委員として近くで教会生活を送って参りました。

古本師は同世代の神戸教区の同労聖職が通られた松蔭のキリスト教学科卒業その後英国ケラム留学のコースでなく、聖公会神学院を出られ昇天に赴任後カナダのウィックリフの神学校へ留学と言う少し異なった学びをされた方でした。先生は兎に角まじめな信仰者であり、酒も煙草も嗜まれず、教会は祈りと学びの場であるとされ、つまらぬ冗談や与太話などには耳を貸されることはありませんでした。私のような俗人との付き合いはあまり得意ではなかったのですが、先任の伝道師飯塚マリ子師の良きサポートを受けながら、牧会に、付属の幼稚園経営にと全力を尽くされました。読書をよくされ集會室に図書コーナーを設けて信徒にも学

びを薦められました。今も続いている月報発行も師によって始められたものです。主教就任後はその職に専任すべきとして、他の職を兼務されませんでした。高齢化の進行に伴い信徒の減少傾向が顕在化する中でその職を務められ、年度毎の教会標語と聖句を掲げることや伝道区活動の活性化の提言、毎月のレクイエム実施など教会活動の基礎の充実を図ろうと働かれました。

今振り返ると教区主教への就任、首座主教としての務め等は師が自ら望まれたもので無く主によって備えられた道でありその道を、生涯を通して精一杯歩まれた方でした。主の導きによりご長女が聖職者となられたことは主教の喜びであつたでしょう。一生懸命に仕えてこられた主のみもとで安らかに憩われることを心から祈ります。

(神戸昇天教会信徒)